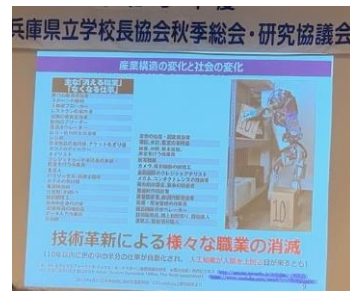


10月13日に県立学校長会があり、各委員会からの報告に加え、東北福祉大学教授長田徹氏より、「学習指導要領前文

を読む」というテーマでご講演いただきました。講演では日本の中学生・高校生の自己肯定感の低さや高校生の人口が著しく減少する



ことや技術革新による職業の変化などに触れ、基礎学力があるのに十分に生かしていない現状をどのように克服していくか、何が求められるかということについて学習指導要領の前文から読み解けることを話されました。成年年齢の引き下げと同時に定年延長が進められ、少子高齢化や技術革新により10年以上前から言われているAIに取って代わられる職業等を見ても「自ら考えること」の重要性が指摘できます。一方で自殺を選ぶ生徒の数も残念ながら増えており、将来への不安、特に学習面の不安や社会への適応に対する不安を払拭していくことが喫緊の課題となっています。新型コロナウイルスの感染拡大に伴い学校にも導入されたりモット授業やBYODにより一人1台端末を持つことで学校教育のあり方自体も問われています。教育活動を生徒が自ら考え、生徒主体の教育活動にしていく学校運営が求められているとのことでした。生徒との面談でも登下校の体操服着用等の話が出てきますが、「それで本当に良いのか。成年年齢になる人間としての服装への社会の理解は追いついているのか」という問いかけを逆に生徒たちに返しています。校則への理解も進め、自分たちの学校生活を守るためにどうすれば良いかをしっかりと考えさせなければならないと思っています。先生方のご協力、保護者の皆様のご協力そして地域の皆様のご理解を得なければならないことだと思っていますので、一緒に考えていただければと思います。

先日村岡高校に行った際に、通級指導と一緒にスタートさせた先生と話をしてきました。1学期にも同じようなことを書いたかもしれませんが、右のような特性を持った生徒に対してどのように生徒理解をし、必要とする配慮をしていくか等基本的なことをその先生が作成された資料等を見せていただきながら話をしました。他にも多くの特徴があるのですが、これらは家庭の躾や親の育て方が原因ではなく、またサボっているのではなく、生まれつきの脳の機能障害の可能性があるとということです。他にも「興味関心が狭くてこだわりが強い」等といったことも挙げられますが、私たちにもあてはまることもあります。こだわりの強さは良い方にも活かすことはできますが、「〇〇できない」など否定的な要素が強い場合にはなかなか良いことを考えることはしにくいです。そういったときに「紙に書く」など記録することによって少しでも改善を図る方法を伝えていくのが通級指導の原点で、困り感をなくす方法を伝えていこうとすることです。そこで私たちが注意しなければならないのは、その生徒の特性を正しく理解することです。強い叱責で改善することはなく、二次的な問題を防ぐためにも合理的な配慮を提供していかなければなりません。昭和や平成の初期にもこのように困っている生徒は一定数いたと思われるかもしれませんが、あまり「個」というものが強調されず、中学校教育まで進路等の選択肢が少ない状況であったため、あまり目立たなかったのだと思います。ゆとり世代となり、「個」をしっかりと考えられるようになり、選択の幅も広がったことで、「自ら考えて行動する」ことが求められたことによって考え方の異なり方が顕著になり、そういった特性がクローズアップされてきたのではないかと思います。また現代は「多様性」を受け入れる社会になってきました。お互いを理解する上で、相手のことも自分のことも「知る」ということが大切になってきています。何を持って「普通」とするか、自分の「普通」という基準は何か、コロナで生活が一変したときも「普通」の生活という話が良く出ました。「生きにくさ」や「困り感」が少しでも軽減され、共存、共生できる社会を作る働きかけの一つが通級であると思っています。相談する、助けを求める、気付くといったお互いを意識することを通して、生徒理解を今後も深めていけるようにしていきたいものです。

- こんな生徒はいませんか？
- 勉強はできるのに人付き合いが苦手
 - 話せるけど場の空気を読みにくい
 - 変化に弱くて混乱しやすい
 - 遅刻や忘れ物が多い
 - 提出物が出せない
 - 落ち着きがない
 - 身の回りの整頓ができず、物をよくなくす
 - 何度注意しても同じミスを繰り返す など